

SU-35 の対中輸出に暗雲か

漢和防務評論 20160703 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

SU-35 の対中輸出は昨年末契約が成立し、あとは中国が SU-35 の初号機を受領するのを待つだけと思っていましたが、ロシアのメディアに西側の記事を引用する形で SU-35 の契約は未だ効力が発生しておらず再交渉が必要との記事が掲載されたようです。

符合するように SU-35 の対中交渉に携わったロシア軍事工業界の重鎮が次々と離職または定年退職させられているようです。

中露間では、何が起きても不思議ではない感覚を我々は持たねばなりませんね。

平可夫

2015 年 11 月、ドバイ航空ショーの 5 日後、中露双方は、SU-35 戦闘機 24 機を対中輸出する契約書に正式に署名した。全ての契約交渉は終了しており、今年 2 月、シンガポール航空ショーで、スホーイ航空機集団副総裁の A.クリメンチェフ氏は、KDR に対し：今年末に最初の SU-35 が中国に引渡されるであろう、と述べた。

ところが、今年 3 月、ロシアメディアは、ウォールストリートジャーナル紙の記事を引用し、ロシア ROSTEC 公司総裁（註：ロシア最高レベルの武器装備輸出総公司以、国家武器輸出公司を隷属する）S.チェメゾフ氏への取材内容を次のように報道した：今年（2016 年）は、中国に SU-35 を渡せない。契約書にはすでに署名したが、未だ効力が発生しておらず、さらに許可を得る手順を踏む必要がある。その上でロシア側と中国側の批准を得る必要がある。全ての手続きは 2016 年の夏か秋には終わるであろう、と。

上述の文章は、中国の各種軍事ニュースの記録及び現在までの KDR の記事にはなく、原文はもちろんウォールストリートジャーナル紙の記事も見ることがない。中文版及び英文版のウォールストリートジャーナル紙のホームページにも、SU-35 の対中輸出関連の最新報道はない。

軍事関連ニュースは、特に中国のネットサイトや中国の新聞に出た軍事ニュースは、特に注意する必要がある。軍事ニュースの背後には、同時に多くの思惑がある。

これをこの機会に説明する。相当重要な内容である。

まず最初に、原文はどこか？誰が報道したか？誰が述べたか？そして必ず原文を点検し、タイトルと内容が一致しているか？翻訳が正確か？或いは粗雑であるか？を確認しなければならない。通常、タイトルは、報道機関及び記者が自らの責任で付ける。欧州、米国及び日本のメディアは、またウォールストリートジャーナル紙の類は、記

事内容が相当厳密で無から有を生んだり、或いはニュースを偽造することは出来ない。”偽造”の文化的土壌や教育的背景が存在しないからである。記事には必ず事実が必要であり、それに対する評価や見方が記者や編集部の仕事になる。

ついでに説明すると、本誌総編集（註：平可夫氏）は、ロシア軍事工業界の上層部と25年間の交流があり、彼らの仕事のやり方を知っている。しかしS.チェメゾフ氏はメディアの取材、特に外国メディアの取材を好まない。これが、今迄彼だけ、漢和が取材経験がなかった理由である。彼は、通常公の場でのみ、記者グループが提出した質問に答える。少なくともKDRの記憶では、彼は西側メディアの単独取材を受けたことはなかったと思う。

もしウォールストリートジャーナル紙に真にこの文章があるならば、これは当然事実であることを意味する。

中国メディアの”報道”や”転載”に関しては、以下の事情に注意する必要がある。

報道が事実で、標題も正確であるもの。

中国の「解放軍報」及び「参考ニュース」はそれに合致する。前者は形式的で内容が空虚な文章が多いが、決して乱雑な文章ではない。

偽造記事。

中国には、外国の出版物に記述がなく、報道もない根本的に”偽造”された記事の例が多い。特に一部の軍事専門サイトは、必ず原文の有無及び内容を点検する必要がある。

改竄及び原文の意味の誇大化。

中国で引用された「漢和」を例にとると、標題及び評論内容まで改竄した例がある。改竄後、ある時点で中国及び香港の専門家の批評を求めている。事件としては極めて面白い。

例えば、いくつかの中国の軍事専門サイトは、3月に「漢和：FC-31は1機も売れなかった」との標題で、KDRのドバイ航空ショー報道記事を”転載”した。いつも漢和を読んでいる読者は、このような書き方を信じるであろうか？完全な偽造である。原文報道は、このように結論付けてはいない。

類似の例は次の通り：「平可夫：基地はめちゃくちゃ、中国空軍は戦いを始めれば必ず（註：肯定の字句を使用）惨敗する」これは2012年に我々が、各国の空軍基地建設に触れた報道に関するものである。全文を通してこのような字句は無く、我々は、”肯定”のような字句は使わない。

更に典型的な事例は：中国メディアの報道「平可夫：中国は、空母のアレスティングワイヤーを造れない」との記事である。我々の2010年の報道原文は：”ロシアはアレスティングワイヤー製造技術を中国に提供しない。中国の空母建造は重大な困難に遭遇する。しかし中国の技術コピー能力を見れば、遅かれ早かれ複製する”

である。

上述に類似の”中国報道”は、「漢和」のニュースだけでなく、その他の外国メディアも含まれる。一部の中国紙が”転載”する”外国刊行”ニュースは、中国軍事工業に対する自虐性があり極めて奇怪と言える。中国内部の軍事工業界の利益集団がこの転載記事が利用したのであろうか？或いは、その他の目的があるのか？注意しなければならない。

中国軍事工業が同業者間で悪口を言い合う風習は、世界的に有名である。極端な場合、契約を破棄させてしまう。例えば、A-100型ロケット砲をアフリカ州の某国に輸出しようとした契約である。最終的に履行されなかった。現在、中国軍工は「漢和」の名前を利用して、他の会社の製品を貶しめようとしているのだろうか？例えば、上述のFC-31の例である。我々は、この戦闘機がF-35の完全な盗作であるとは考えていなかったはずなのに。

SU-35に関する紆余曲折

SU-35の問題に戻る。

我々は、S.チェメゾフ氏が上述の談話を行ったかどうか、ここでは考証しない。ここではロシアの武器輸出の一般的手順に就いて述べる。

周知の通り、一般的には、ロシア国会での批准の問題が存在しないので、ロシアの武器輸出契約は、一旦外国と契約が済めば、契約を執行するだけである。政府部内の全ての審査業務は、契約以前に終了している。

第一段階：輸出の可否の審査：ある国の顧客の注文に対して、最初にロシア連邦軍事技術協力局が政策的審査を行う。審査の過程で、およそ13個部門との密接な交渉が必要である。例えば、ROSTEC、外交部、国防部、総参謀部、対外情報局、連邦反スパイ局等々との調整である。

第二段階：国家安全委員会に報告され、プーチンの承認を得る。当然ここでは大口の輸出のみを指している。第一、第二段階終了後、第三段階に入る。この段階は4人の働きが極めて重要である。

第三段階：ロシア国家武器装備輸出入総会社に委任し、技術面の交渉を行い、最終的に協議書に署名する。署名後、再度審議を要する問題は発生しない。

第四段階：契約書に署名後であっても、購入国が国連から武器禁輸国に指定されたり、或いはその他外交上の理由で挫折する場合がある。この種の状況の場合は、当然連邦軍事協力局が正式に書面を提出し、国家安全委員会に計り契約を取り消す。S-300型地对空ミサイルの対イラン輸出問題が似ている。

第五段階：総額に含まれる一連のサブ契約に署名する。SU-35 の事案について言えば、予備エンジン、武器、レーダー等に関する契約である。

以上はロシア側の手続きで、中国側は、SU-35 契約は習近平と特に親しい許其亮大將が協議書に署名した。当然、これは最終協議を意味し再審査の問題は発生しない。

したがって結論：トラブルの本当の理由は何なのか？KDR が直接確認するまで待つて欲しい。ここでは一つの推理を述べておく：もし SU-35 の対中輸出手続を繰り返すならば、今年中の SU-35 の手渡しは不可能である。このような状況が出現したとしても、KDR は絶対に驚かない。IL-76/78 の対中輸出の際も手続が繰り返されたか、或いは破棄された。この事件から 10 年も経ってはいないのである。契約書に署名してから 3 ヶ月も経たないのに、状況の変化が出現したのであるか？それでも KDR は驚かない。

シンガポール航空ショーで KDR が受けた印象は、ロシア軍事工業界の重量級の人物は、誰一人として SU-35 の対中輸出を歓迎しなかった。ロシアとアルジェリア、ベトナムとの武器貿易では、このような印象は全く受けなかった。その場でロシア側が真に喜び、如何なる異議も示さなかった。

ロシアとインドの軍事協力事業は、第五世代機、及び SU-30MKI である。この事業に関して、ロシア軍事工業界の内部では契約に関して何の問題もなく、後に発生した一部の問題は技術的な問題である。例えば、技術移転（第五世代機）の範囲、及び開発資金の配分、提供部品の価格、部品提供の時間表等々の問題である。

マレーシア空軍の SU-30MKM についても、同様の現象が起きている。主として部品の価格、及び提供時期であり、継続交渉しているが双方に意見の食い違いがある。しかし全般に友好的である。

KDR は、中露間の武器貿易でこのような友好的な軍事契約を見たことがない。中露間ではたとえ契約書に署名を終わっていても、ロシア軍事工業界の上層部はみな反発心が強く残っている。聞くところによると、ただ一人プーチンだけがこの契約の成立を主張しているようだ。

KDR はここで再度、読者の注意を喚起したい：それは、元 SUKHOI、UAC 総裁の M.POGOSYAN が 2015 年 11 月に離職したことだ。2015 年 8 月のモスクワ航空ショーでは彼は孤独であった。丁重に扱われる光景は見られず、最後は一人で UAC の職場を離れた。本誌平可夫は、酷いと思った。本来なら、彼を追いかけて挨拶しようと思った。当時平可夫は、建物内で取材のため待機していたが、再び彼に会える機会が来るとは思ってもいなかった。現在、知るところによれば、彼が離職した理由の一つは、SU-35 の対中輸出問題であると言う。彼は、市場の原理に従うべきであると主張し、徹底的にロシアの知財権を保護しようとした。

この件は、KDR はすでに報道したが、現在重複してその他の要素をお知らせする。2015 年から、対アジア武器輸出に関わるその他の若干のロシア軍事工業界の重量級人物が離職及び”定年退職”させられている。これは不思議である。

M.POGOSYAN と同じ理由で辞めたのであろうか？

以上